

ただいま休館中

施設改修のため休館中の当館の活動をご紹介します。

改修工事の状況

開館 50 年を迎える 2017 年、改修工事も着々と進んでいます。博物館正面入口の仮囲いには、当館自慢の各時代の資料がデザインされています。お近くにおいでの際は、ぜひご覧ください。

鎌倉国宝館にて展示中

現在、鎌倉国宝館の平常展示「鎌倉の仏像」に県博の仏像コーナーが設けられており、常時4体の彫刻作品が展示されています。パンチの守も出張中なので、鎌倉を散策する際にはぜひ国宝館にお立ち寄りください。
平常展示 2月14日（火）～3月31日（金）
※毎週月曜日及び3月14日（火）～17日（金）は休館

博物館体験教室「大人の工場見学ーキリンビール横浜工場ー」

昨年12月14日に、キリンビール横浜工場で「大人の工場見学」を開催しました。当館学芸員による講義「日本のビール産業史」の後、最新のビール製造工程を見学しました。歴史から製造まで、ビールを深く味わう講座となりました。この見学施設は昨年10月1日にリニューアルオープンしたばかりです。プロジェクションマッピングなど最新の映像技術を使った説明には驚きの連続でした。

これからの催し物

■県博講座

室町水墨と関東水墨	5/16・30、6/13・27（火）	10:00～11:30
神奈川の近代美術	5/16・30、6/13・27（火）	14:00～15:30
中世の古文書を読む	6/1・15・29、7/13（木）	10:00～11:30
大山を深く知る	6/1・15・29、7/13（木）	14:00～15:30
近世古文書入門講座（初級編）	6/6・20、7/4・18（火）	10:00～11:30
地域から見た神奈川のみほとけ	6/6・20、7/4・18（火）	14:00～15:30
かながわの人生儀礼	6/8・22、7/6・20（木）	10:00～11:30
歴史系博物館 × 自然系博物館（仮）	6/8・22、7/6・20、8/3（木）	14:00～15:30

■県博講座 学芸員が推すこの逸品！

阿弥陀如来坐像―運慶様式の仏像―	5/13（土）	10:00～11:30
月岡芳年の浮世絵	5/27（土）	10:00～11:30
堆朱鳳凰牡丹文香合―館蔵の彫漆作品とともに―	6/24（土）	10:00～11:30

■人文科学講座

醍醐寺の法流と東国	6/24（土）	14:00～16:00
-----------	---------	-------------

■地域巡回講座

国宝金沢文庫文書にひたる	5/10（水）	13:30～16:30
--------------	---------	-------------

2016 年、「金沢文庫文書」が国宝に指定されました。この講座では県立金沢文庫を会場とし、展示担当者による講演と解説付き展示見学により、文書の面白さを堪能していただきます。（観覧料の実費負担あり）

■博物館体験教室（一般）

日本の伝統技術を学ぶ―組紐体験― 6/9（金）①10:00～12:00 ②14:00～16:00

組紐は、古代から受け継がれた、正倉院宝物や武具、仏神具等にもこの伝統技術です。今回は、最も古い技法である指のみを使って紐を編む「クテ打ち」について、体験します。（材料費の実費負担あり。希望回を明記のこと。）

発行 神奈川県立歴史博物館
〒231-0006 横浜市中区南仲通 5-60
（休館中のため事務所は右記住所へ移転中）

発行日 平成 29 年 3 月 6 日
印刷 株式会社 D-サイト

表紙写真 「資料紹介」の北尾政演「青楼名君自筆集」の「あふぎや 瀧川 花扇」（部分）を加工して使用しています。



仮囲いがされた博物館の様子



鎌倉国宝館での展示の様子



キリンビール横浜工場での見学の様子

※日程・内容は都合により変更となる場合があります。

会場

宇徳ビル 8 階会議室（地域巡回講座等の講座を除く）

受講料

無料（保険料、観覧料等実費負担が必要な場合があります）

申込方法

「往復はがき」に郵便番号・住所・氏名（ふりがな）・電話番号・行事名・開催日を明記のうえ、下記宛先へ。または、ホームページ「催し物案内」からお申込みください。1 つの催しにつき 1 通でお申込みください（複数名で申込み場合は全員分氏名を明記）。申込多数の場合は抽選。

申込締切

5 月はじまりの講座 3 月 31 日（金）
6 月はじまりの講座 4 月 28 日（金）

申込先・問い合わせ

〒231-0007 横浜市中区弁天通 6-85
宇徳ビル 6 階
神奈川県立歴史博物館 事務局
企画普及課

電話：045-201-0926

※自動音声の後に「1」を選択

URL：http://ch.kanagawa-museum.jp/



神奈川県立歴史博物館

だより

平成 29 年 3 月 6 日発行 通巻 204 号

MAR. 2017 Vol.22 No.

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

3



空調工事で「再発見」！旧横浜正金銀行本店本館の魅力 … 2

資料紹介 北尾政演「青楼名君自筆集」修復報告 … 6

休館中の活動紹介 … 8

これからの催し物 … 8

空調工事で「再発見」！旧横浜正金銀行本店本館の魅力

丹治 雄一

はじめに

本誌前号（通巻 203 号）をご覧いただいた方は、デザインが大きく変わったことに驚かれたのではないのでしょうか。そこで表紙に使われていたのは、当館収蔵庫とその前室の写真でした。この場所が 1904（明治 37）年に妻木頼黄^{よりなか}の設計で竣工した横浜正金銀行本店^{しょうきん}の金庫室であったことは、これまでも特別展や本誌などで取り上げたことがありましたが、収蔵庫やその前室として使われていたことから、展示で紹介したり、来館者の方に直接ご覧いただいたりする機会はかなり限定されていました。すでに本誌でもご案内したとおり、当館は昨年 5 月末から 2018（平成 30）年 4 月下旬まで、空調設備等の改修工事のため約 2 年間の休館に入っており、博物館資料や事務用物品などの「お引っ越し」を経て、昨年 10 月から工事に着工したところでした。ここでは休館中あるいは工事期間中にしか見ることができない歴史的建造物としての当館の内装や構造体などの「見どころ」や新たな「発見」についてご紹介したいと思います。

1 旧金庫室

当館で収蔵庫として使用している地階の旧金庫室は、次の項で触れる、同じく現在は収蔵庫となっている旧保護預品庫^{ほごあずかりひんこ}と並んで、横浜正金銀行時代の内装や建具などがよく保存され、建物内部で最も建築史的な価値が高い場所です。横浜正金銀行本店は、1923（大正 12）年 9 月 1 日に発生した関東大震災により、地上 3 階地下 1 階建ての建物のうち、地上階の内装のほぼすべてと屋上のドームなどを焼失しています。地階にあって焼失を免れたこのふたつの部屋は、建物創建当時の内装や設備の保存状態が良好な貴重な空間なのです。

それでは、横浜正金銀行本店本館の創建時の建築概要を示した『横浜正金銀行建築要覧』（以下、「建築要覧」と略記します）という資料により、銀行時代の金庫室の概要を確認しておきましょう。金庫の壁の厚さは「四尺二寸六分」（約 1.3 メートル）におよぶ非常に分厚いもので、「内部ハ使用ノ目的ニ従ヒ之ヲ三室ニ区画セリ」とあります。また、「金庫前ノ広場ハ鉄

柵ヲ以テ包囲シ之ヲ改銀所」としており、この改銀所は金貨銀貨を金庫内に入れる前に検査を行う場所であると記載されています。当館では三部屋に区画された金庫の内部を収蔵庫として、金庫前の広場「改銀所」を収蔵庫の前室として使用しています。

これらの場所を撮影したのが写真 1・2 です。写真 1 では三部屋に区画された金庫への入口扉のうちの 2 箇所が確認できます。写真 1 と写真 2 を対照してご覧いただくと、3 箇所の扉の位置関係が把握できると思います。この 3 箇所の金庫扉は、その銘板からイギリスのチャプ社の製品で、現在当館が所蔵している横浜正金銀行本店の震災復旧工事関係資料により、うち 2 箇所の扉が震災後に設置されたものであることが判明しています。また、写真 2 では、金庫まわりにめぐらされた鉄柵を見ることができます。金庫を囲むように設置された鉄柵の内側が「改銀所」で、鉄柵の外側は「建築要覧」に収められた創建当時の平面図に「広間」と表記されていました。広間への出入りには、



写真 1 旧横浜正金銀行本店本館改銀所および金庫扉



写真 2 旧横浜正金銀行本店本館金庫室の全景

2 箇所の鉄扉が使われました。この「金庫」「改銀所」「広間」からなるスペースが金庫室であり、「金庫」へ金銀貨および紙幣を収納する導線は、「広間」→「改銀所」→「金庫」となっていました。

さらに、写真 1 と写真 3 により金庫室の壁面と天井の仕様について見てみましょう。一見すると白いタイル仕上げかと思われる壁面と天井には、耐火煉瓦の仕上げとして露出する面にだけ白い釉薬^{うわぐすり}をかけて焼成した白釉耐火煉瓦^{はくゆう}が使われています。耐火煉瓦は白煉瓦とも呼ばれ、赤煉瓦と比較して製造時の焼成温度が高く、吸水率が低いため防湿対策で使用されており、また、仕上げの塗装が不要となるため、メンテナンスフリーの視点もあったものと考えられます。もう一度図 3 を見てみると、金庫室の天井は鉄骨の梁と梁の間を白釉耐火煉瓦でアーチ状に造っていることがわかります。ここで使われているのは、楔形に成型した迫持煉瓦^{せりもち}と呼ばれる形状の煉瓦です。明治期の煉瓦造の建造物では、床（天井）は木造であることが一般的で、ここで紹介したような不燃材料を使用した床（天井）は「防火床構造」と呼ばれています。横浜正金銀行本店の建物で「防火床」が採用されたのは、「建築要覧」に「本建築ハ主トシテ耐震耐火ヲ目的トセル構



写真 3 旧横浜正金銀行本店本館金庫室の防火床

造ニシテ」と述べられていることに理由を求めることができます。なお、横浜正金銀行本店に先立つ 1896（明治 29）年に辰野金吾設計により竣工した日本銀行本店本館も、金庫室の壁面と天井は白色耐火煉瓦仕上げとなっていました。

収蔵庫前室は柵や作業机が置かれていて、休館前にはこのようにきれいに片づいた部屋の全景写真を撮影することは不可能でした。これらの写真は、金庫室の内装と金庫扉などの現況を示す貴重な記録写真となりました。

2 旧保護預品庫

金庫室と同様地階に配置されていた保護預品庫は、「建築要覧」に「預ケ主ノ貴重品ヲ保管スル所」と記載されており、現在の言葉で言えば貸金庫に相当する施設でした。この保護預品庫は、日本で最初期に整備された本格的な貸金庫とされており、当館では収蔵庫として使用してきました。金庫室と同様、休館前の室内には柵が林立して、資料がギッシリと収蔵されており、部屋の内装がわかる写真を撮影できるような状態ではありませんでした。「建築要覧」にはこの部屋のセキュリティ対策に関して豊富な記述がありますが、部屋の内装については目立った記載がありません。しかし、同書には写真 4 と写真 5 で示した建物竣工時の写真が掲載されています。ちなみに、同書中に保護預品庫の写真はありますが、金庫室の写真は収められていません。金庫は銀行においてセキュリティ上最も配慮すべき施設であるので、写真が掲載されなかったのだと思われます。

さて、「建築要覧」に収められた 2 点の写真は、「保護預品庫内部」（写真 4）と「保護預品庫内預ケ品出納取扱室」（写真 5）という名称がつけられています。



写真 4 横浜正金銀行本店保護預品庫内部（『横浜正金銀行建築要覧』所収）



写真5 横浜正金銀行本店保護預品庫内預ヶ品出納取扱室
(『横浜正金銀行建築要覧』所収)

「建築要覧」所収の平面図を見ると、保護預品庫は地階の中央部の金庫室と背中合わせの場所にあり、廊下に面して設けられた3箇所の扉から室内へアクセスできるようになっていました。写真6はそのうちの1箇所の扉を写したもので、廊下を先に進んでいくと、もう2箇所の扉が現存しています。この室内への出入口となる金庫扉は、国産の竹内金庫店製で、室内には壁で仕切られた一室があり、平面図ではこの一室が「保護預品庫」、その周囲が「預ヶ品出納取扱前室」「預品庫」と記載されています。

しかし、「建築要覧」中の概要記載の箇所ではこれらの部屋をまとめて「保護預品庫」と記述しており、写真5の写真にも「保護預品庫内」と記載されていることから、ここでは「保護預品庫」「預ヶ品出納取扱前室」「預品庫」をまとめて「保護預品庫」とします。

写真4と写真5からわかることは、前項で見た金庫室は壁と天井がすべて白釉耐火煉瓦仕上げであったのに対して、保護預品庫は腰壁の部分までが白釉耐火



写真6 旧横浜正金銀行本店本館保護預品庫の金庫扉



写真7 旧横浜正金銀行本店本館保護預品庫

煉瓦仕上げで、壁の上部と天井は漆喰仕上げとなっている点です。このような仕様の相違がどのような意図によるものか、資料からたどることはできませんでしたが、写真5とほぼ同じアングルから撮影した写真7を見てみると、この部屋も創建当時の内装をよくとどめていることがわかりいただけると思います。



写真8 旧横浜正金銀行本店本館保護預品庫非常用出入口扉

また、工事にともなって棚や物品を撤去したことによる新たな「発見」もありました。それは、保護預品庫への非常用の出入口として設置されている小さな金庫扉のメーカーが判明したことです。横浜正金銀行本店には創建当時、地階の14箇所に金庫扉が設置されており、休館前に行った調査では、現在は撤去された箇所も含めて、イギリス・チャブ社製が6箇所、竹内金庫店製と山田金庫店製が各4箇所ずつと想定していました。しかし、これまで棚や物品が置かれていて詳細な調査ができず、山田金庫店製と想定していた保護預品庫への非常用出入口の扉(写真8)を確認してみたところ、鍵穴部分の形状と刻まれた文字(写真9)が保護預品庫



写真 9 旧横浜正金銀行本店本館保護預品庫非常用出入口扉鍵穴部分

への通常の出入口となる竹内金庫店製の金庫扉の鍵穴部分（写真 10）と同一であることが確認できたのです。これにより、休館前は各 4 箇所と想定していた竹内金庫店製と山田金庫店製の内訳は、竹内 5 箇所、山田 3 箇所となりました。

貸金庫も含めた金庫室には、通常人ひとりが寝そべってやっと通ることができるくらいの小さな非常用の出入口が設けられています。このように小さな扉のメーカーがわかったという小さな「発見」ではありますが、休館と工事がなければ見い出すことができなかったもので、この建物の調査研究に継続的に取り組んでいる筆者にとっては非常に大きな「発見」であったと考えています。

おわりに

旧金庫室と旧保護預品庫は、今年の 2 月中旬段階では、工事の進捗にともない室内の養生が行われており、ここでご紹介したような室内の様子を再び見ることができるのは、工事が無事に竣工した時になると思われま。これらの各室は、工事竣工後も引き続き収蔵庫として使用することになりますので、実際にみなさんにご覧いただく機会を設けることは、今後も非常に難しいのではないかと考えています。そうであるならば、創建当時の内装や設備が良好に保存されているこれらの部屋をしっかりと調査して記録に残し、それを展示や本誌などさまざまなかたちで発信することが、私たちがなすべき重要な責務であると思います。そのことを胸に刻んで今後も工事の進捗を見守っていくつもりです。

現在、空調工事は建物内の各室の空調機器の交換のために、1995（平成 7）年の県立博物館から県立歴



写真 10 旧横浜正金銀行本店本館保護預品庫金庫扉鍵穴部分

史博物館へのリニューアル時に設置した天井の撤去に進みつつあります。工事業者をお願いしてその様子を見学した時には、リニューアル時に設置した天井よりかなり高い位置に 1904 年の創建時の天井（上階の床）の構造材が姿をあらわしつつありました。写真 11 は創建時は書記課と株式課の執務室であった建物 1 階の部屋の天井（2 階の床）です。「建築要覧」には 2 階と 3 階の床は「I 形鋼鉄梁ヲ横架シ其間ニ弓形海鼠板ヲ置」いたと書かれており、写真 11 に見られるオレンジ色に塗装された波形の板状鉄板である「生子鉄板」とそれを支える鋼材は、まさに資料に記載された創建当初の建築材料となるわけです。現在は脚立を立てて覗き込むように見ることしかできませんが、リニューアル時に設置した天井がすべて撤去されれば、各室の天井の様子をさらに詳しく調査できるのではないかと考えています。

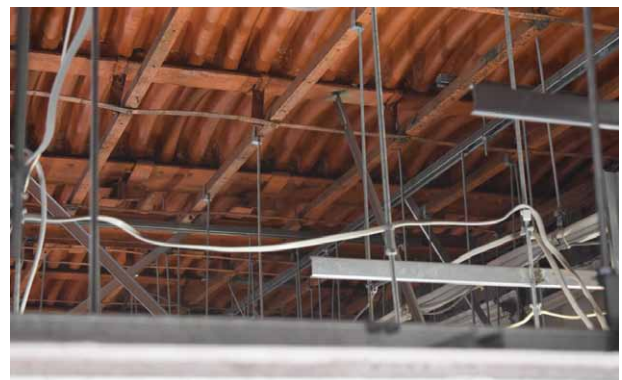


写真 11 旧横浜正金銀行本店本館 1 階天井の現況

今後工事の進捗にともない、まだまだ新たな発見がありそうです。工事中にたくさんの発見をして、改めて本誌でご紹介したいと考えています。

（たんじゅういち・主任学芸員）

資料紹介 北尾政演「青楼名君自筆集」修復報告

桑山 童奈

神奈川県立歴史博物館の数多くの収蔵資料の中でも、たんばつねお丹波恒夫氏が収集した浮世絵「丹波コレクション」は当館だけでなく他館の展覧会や出版物、映像メディアで紹介される機会の多い作品群です。

約 6,200 点からなるコレクションは丹波氏の明確な方針により収集されたもので、保存状態も良好です。しかし、制作された時から長い年月を経ている浮世絵版画には汚れが目につくものもあります。また、過去に行われた修復が今となってはあまりよくなかったと判明することもあり、修復のプロによる適切な手当を必要とするものも少なくありません。

今回は平成 27 年度まで 3 か年にわたり修復を行った「せいろうめいくんじひつしゅう青楼名君自筆集」について紹介します。

「青楼名君自筆集」は浮世絵師としてよりもむしろげさくしやさんとうきようでん戯作者山東京伝（1761-1816）としての知名度が高いきたおまさのぶ北尾政演が描いたもので、新吉原の遊女を二人ずつ描

いた 7 点の錦絵作品に序と跋を加えた計 9 点を天明 4（1784）年に『けいせい吉原傾城 新美人合自筆鏡』と題した画帖（絵を貼り込んだ折本）にして、喜多川歌麿や東洲斎写楽を売り出した版元（出版プロデューサー）つたや蔦屋重三郎が刊行しました。現在丹波コレクションでは、画帖ではなく 1 枚ずつの状態の 9 点すべてを所蔵しています。

画面は縦 37.7cm、横 61.1cm で、同時期の浮世絵版画 2 枚分となる大奉書全紙判という大きなものです。新吉原で繰り広げられた春の情景を切り取った図に、実在した遊女二人と新造や禿を描き、遊女が自ら書いたという和歌や漢詩（自作でないものもあり）を添えています（写真 1）。日本人らしくないスレンダーなプロポーションの女性たちが華やかな装いをしている姿はとても艶やかです。大人の女性だけでなく、写真 2「てうしや ひなつる てう山」では禿が火鉢の炭



写真 1 「青楼名君自筆集 あふぎや 瀧川 花扇」（修復後）



写真2「てうしや ひなつる てう山」(部分)

に息を吹きかける様子が愛らしく描かれています。

また、人物だけではなく着物の文様や身の回りの様々な調度品なども、細部まで緻密な表現がなされています。同じく写真2の左側で遊女が寄りかかっている机には螺鈿が美しく施されているのが見て取れます。

これらの表現が美しく、魅力的に見えているのは、シャープに摺られた輪郭線の力も大きいです。つまり、この「青楼名君自筆集」は、絵、彫、摺、三拍子そろった極めて上質な多色摺版画(錦絵)といえます。

「青楼名君自筆集」は浮世絵師北尾政演の代表作に位置付けられており、版元蔦屋重三郎が制作した出版物の中でも重要な作品です。また神奈川県内の東海道の宿駅や観光名所、開港当初の横浜を描いた横浜浮世絵、明治の浮世絵などが充実している丹波コレクショ



写真3「あふぎや 瀧川 花扇」から剥がした裏打紙
左(表から見て右側)にシミが広がっています。

ンの中でも美人画の代表格といえます。

したがって、他の美術館、博物館で開催される展覧会への貸し出しの機会も多いことから、裏打紙や画面の汚れなども気になり、専門家に全9点の修復を依頼することにしました。

修復前は、1枚ずつ裏打紙があたった状態で、9枚が重ねられて布張りの帙に収められていました。いつのことかは不明ですが、その重なった状態で水を被ってしまったと推測される染料のにじみや褐色のシミが、それぞれの裏打紙に散見されました。幸いなことにシミが本紙に及んでいる様子はありませんでしたが、傷んだ裏打紙(写真3)を除去することとし、本紙だけでも保存、展示に支障はないと判断できたので、新たな裏打ちは行わないことにしました(写真4)。



写真4 修復後の「あふぎや 瀧川 花扇」の裏面
裏打紙がなくなり表の絵が透けて見えるようになりました。

写真提供:(有)山領絵画修復工房

また、画帖であったため画面中央の折目が傷んで汚れ、手の触れることが多い本紙の周囲も汚れていました。それらは刷毛や練りゴムを用いて汚れを取り除きました。以上のような処置を行った結果、修復前の状態と比較して絵がはっきりと見えるようになりました。

私たち学芸員は、これまでながく生きてきてさらに生き続ける文化財のごくわずかな時間に関わるだけです。その時々最善と考えられる処置を行い、文化財をよりながく生き延びさせることが使命です。この修復の結果、美しさを取り戻した「青楼名君自筆集」を多くの来館者に見ていただいて、江戸時代に摺られた浮世絵版画の技術の素晴らしさを実感していただければ幸いです。

(くわやまどな・主任学芸員)